

道心



禅昌寺通信「道心」第26号

編集 日光山 禅昌寺「道心」編集室

発行 平成19年7月1日

〒732-0002 広島市東区戸坂山根3-2-7

TEL 082-229-0618 FAX 082-229-0822

E-mail: zenshoji@bronze.ocn.ne.jp

ホームページ <http://www.zenshoji.org/>

自己とは 何ぞや

禅昌寺住職 横山 正賢

修証義 第六節

当に知るべし今生の我が身二つ無し三つ無し、徒に邪見に墜ちて虚しく悪業を感得せん、惜からざらめいや、悪を造りながら悪に非ずと思ひ、悪の報あるべからずと邪思惟するに依りて、悪の報を感得せざるには非ず。

直訳すれば「よくよく己を見つめてみなさい、この身は二度と得ることの出来ない、やり返しの出来ない一生ですよ。だから いたずらにまちがった考えや見方や甘い誘いに惹かれて、自分よがりの生き方に気づかないままに生きることは、もったいないではないか、いまの生き方は是非善悪の報には必ずあるのだから、せっかくの人生を虚しく、疎かに過ごしてはなるまい。」と諭しておられます。

世間では仏教が死後の世界を説いているかのように、誤解されていることを思うことがあります。確かに教典にはお釈迦様の出現も過去七仏の因縁が強調され、人間が現世に生かされる因縁の深さを強調され、死後の世界も多く述べてあります。

こうした経論は読む人、聴く人、学ぶ人の受け止め方で異なりますし、解釈が真反対になることもあり得るのです。

ですから宗祖道元禅師は仏道修行の用心は、正しい指導者に会うこと、正しい指導者とはどのようなことが求められるか、厳しくお示しになつていきます。「古人いわく、発心正しからざれば、万行空しく施す」分かりやすく申し上げます「昔の人のいわれることに、自分よがりの間違つた生き方をすると、人生全てのことが空しく終わる」と人生の用心を示しておられます。

また指導者（自分自身の受け止め方の正と邪によつて変わることをつぎのようにいつておられます。

「機（人）は良材のごとく、師は工匠に似たり。たとえ良材といえども、良工を得ざれば、綺麗いまだあらわれず、たとえ曲木といえども、もし好手にあわば妙功忽ちあらわれん。」

指導者（自分自身の受け止め方）の

正邪に随つて、何が真実か偽りかが分かれる。とお示しになつています。

修証義第一章は仏教の基本的な見方や考え方を示されているのであります。

私達は得難い命を授かりながら、我見我慢の生き方に気づかず一生を終わることは空しいことではないかと問われているのです。

この第一章は三世と三時、善と悪の分別を如何に受け止めるかの大事を諭しておられると思うのです。私は三世を生きる生き方を学ばせていただきました。いまを生きる自分の生き方を思う思いも、自分の育つた時代や環境によつて異なります。その境遇を如何に受け止めて現世を生きる生き方に、来世（自分の死んで逝く世界ではありません）に生かされてゆくという生き方が問われていると考えるのです。そのように自分の生き方を自らに問いますと、今日一日という日が疎かに生きられない自分を思うのです。そのように思う思いが、私を励ましてくれ元気が出るのです。

善と悪の考え方も、善が悪を生む結果となることも、悪が善を生む機縁となることもあることを、三世を透視して、自他平等の視点で考えなければならぬことに気づきます。

パリ禅道尼苑 訪問記

安佐南区（総代護持会会計）

高瀬 正則



禅道尼苑本部建物

6月7日（木）早朝広島空港に集合した一行が上海経由パリへ向けて飛び立った。曹洞宗ヨーロッパ国際布教40周年記念式典が行われる禅道尼苑訪問の一行で、禅昌寺ご住職、他のお寺様ご住職、壇信徒、坐禅会他の方々総勢28名である。

式典は6月8日（金）～10日（日）の3日間。第一日目の夕食に間に合

うようパリ空港から観光しながら禅道尼苑へ向けバスは走った。禅道尼苑はパリの南約150キロに位置するブロワの郊外にあり最初の宿泊地である。

午後7時になってもまだ目的地に着かない。どうもバスが迷っているらしい。周囲は一面広大な農場で、大小の森が遠く周辺をとりまいてい

て民家もまばらで人影も無い。バス路線は舗装されているとはいえ1車線の細い道を走りまわる。さらに30分ぐらい迷走した先で、1枚の小さな案内板がある森の入口でバスは止まった。500メートル奥に3人の人影が見えた。道は舗装されていない。バスは森の大きな樹木から垂れた枝葉をこすって進入していくと、そこに禅道尼苑が忽然と現れた。そこにはお城の中を改装した本部事務所、本堂、宿泊所、売店、駐車場等がゆつたりと配置されている。初日の主行事が終わり、沢山の禅僧の方々がくつろいでおられた。現地の人たちは仮設テントを張って宿泊していた。泰賢さんは、宗務総長到着直後で大変忙しそうで、対面できたのはしばらくしてからであった。

早速、総勢500人に近い禅僧・関係者の方々が出席された第1日目の夕食会に参加でき、それぞれ決められた番号の席で会食を取った。ロシアアンジェルス及びサンフランシスコから参加された米国在住日本人の団体さん（二行31名）の方々と同席しての食事となり、話が弾んだ。

私達の宿泊所は会食した食堂の2階にあり1部屋5～6つのベッドが置かれた木造の部屋が16室ある。そ

れぞれ分散して第一夜をすごした。外国の人と同室になった方もいた。外は午後の10時でも散歩できるほど明るく、10時30分ぐらいから暗くなり始める。遅くまで鳥のさえずりが聞こえている。森の中は静寂である。

第2日目は、早朝から終日式典及びシンポジウムに参加した。朝6時鈴を鳴らす人のサツサツと走る足音を、目を覚ましたベッドの上で聞く。外はすでに明るい。



広大な境内建物の一つ講堂



禅道尼苑本部前にて今村ヨ一ロツバ布教總監・青山俊董老師と共に

早朝、本堂での坐禅と読経に参加。長身の欧州の禅僧の方々も頭をそり袈裟を身に纏いお勤めをされている。参加者は約400人。坐禅は約40分、朝のお勤めはローマ字で書かれたお経本を手にしての日本語での読経である。日本のお寺にいるような錯覚を覚えた。

シンポジウムでは、午前は青山俊董老師、午後の最後には泰賢事務局長の講演があった。この間、イタリア、フランス、ドイツの伝道教師による講演があり、聴衆はレシーバより英語、仏語、日本語に訳されたものを選択して聞くことが出来た。青山老師の講演は「真理は一つ、

切り口のの違いで争わず」とわかりやすい説法をなされた。泰賢さんの講演は「国際布教に関わるに至る経緯・難しさ・問題点」を英語で1時間あまりスピーチされた。レシーバを耳にして日本語の翻訳を聞くこととなった。米国13年欧州3年目の経験をつまなげ流暢な英語で、自らの経験から感じとられた国際布教の難しさ、問題点、これから期待されることを述べられた。人をひきつける講演ですばらしいものでした。

第3日目は、2日目と同様早朝の坐禅と読経、午前の法要に参加。最後の「パネルディスカッション」は旅行日程上聴講出来ませんでした。今回のシンポジウム講師全員によるもので、泰賢さんも参加されているので大変残念な思いでした。全ての行事の進行、来賓者の接待、通訳等も兼ねられる泰賢さんとはゆつくりと話をする時間は持てませんでした。それだけ活躍されているということに他なりません。青山老師、泰賢さんの時間のとれるのを待って我々一行は記念写真撮影をすませ禅道尼苑を後にしました。

米国から欧州に転任されている泰賢さんの布教活動に尽力されている泰賢さんの現実の姿に接し、これから一寺院だけに専念するのはもったいないことだと感じられたのは、私ひとりだけではなかったでしょう。米国日本人会の方々からは泰賢さんにまた米国へ戻って欲しいとの思いを述べられていました。欧州各国の方々も同じ思いでしょう。



講演する泰賢事務局長

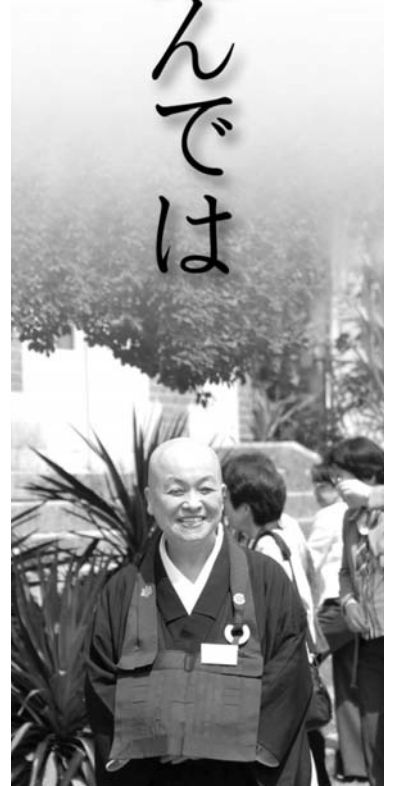
禅昌寺に国際布教に貢献している泰賢さんがおられることは、我々壇信徒の誇りとするところであります。これまで培ってきた国際布教のノウハウと行動力を活かすことなく、一寺院だけに奉仕するのは、必ずしも泰賢さんに望むべき方向ではないと考えます。禅昌寺でのお勤めをベースとしながら、許される最大限で国際布教の一端を引き続き担い貢献できる体制を考えておく必要があります。

近い将来には、国際都市広島で禅昌寺を中心とした国際布教シンポジウムが開催されることを願っています。

今回のパリ禅道尼苑訪問は通常では経験のできないものです。この機会を見逃さず企画していただいた方丈さん・泰賢さんに感謝を申し上げます。有難うございました。

合掌

人を叱る時に 私心や我が潜んでは いませんか。



愛知専門尼僧堂堂頭 青山 俊董

良寛さまは、そこにおられるというだけで居あわせた人々の心を安らかにし、素直にし、ほかほかとあたたかく心の底から生きる力を与えるようなお方であつたようです。

しかし自分自身にはきわめてきびしかったようで「言葉についての戒め」として、「戒語」九十カ条を書き残しておられます。

- 一、ことばの多き
- 一、よく心得ぬ事を、人に教える
- 一、人のかくす事を、あからさまに言う
- 一、憎き心もちて、人を叱る
- 一、悪しきと知りながら言い通す
- 一、手柄話
- 一、呉れてのち、人にその事をかたる
- 一、しめやかなる座にて、心なく物言う
- 一、客の前にて、人を叱る

- 一、下僕をつかうに、言葉のあらき
- 一、いやしきおどけ

- 一、学者くさき話
- 一、好んで唐言葉（外来語）を使う
- 一、悟りくさき話

- 一、酒に酔いて理（理屈）を言う
- 一、かえらぬことを幾度も言う
- 一、人のいやがるも知らず長話
- 一、人の物言い切らぬうちに物言う

- 一、この人に言うべき事を、あの人に言う
- 一、人の器量のありなし

憎しみを持って人を叱るな

——九十カ条のどれをとつても、いずれもハツと思ひ当たることばかり。紙に書き写して自室の壁に貼っておきたいくらいです。

ひょうひょうと子供たちと遊び、野の草花を摘んで鉢の子（托鉢の時に持ち歩くおんりょうき）を忘れてきてしまつたり、ノミ、シラミに日向ぼっこさせ、日がかげるとフトコロに入れてやり、

ノミ、シラミ 野に鳴く虫の声ならばわがふところは、武蔵野の原

などと歌う良寛さまが、日常に使う言葉にしてきえも、これほど自戒しておられたかと、そのきめ細かさには驚くばかりです。なかでも「憎き心もちて、人を叱る」

「客の前にて、人を叱る」と叱る時の心のあり方については、二度もとりあげておられます。

道元禪師のお師匠さまの如浄禪師は修行僧たちを説得するのに、ご自分の履いていた靴を脱いでたいたり、口ぎたなくののしつたりされたけれど、修行僧たちはそれに涙を流して喜んで受けたといひます。そのきびしい如浄禪師がある時おっしゃいました。

「あなた方はみな尊い仏のお弟子さんたちで国の宝です。それをたとえ眠っているから、怠っているからといって、打つたりのしつたりして、まことにもうしわけないこと、もつたいないことです。しかし住職としての責任で止むをえずやっていることですから、みなさんどうぞ慈悲をもって許してください」

と涙を流して懺悔されたと、道元禪師は

『正法眼蔵隨聞記』で語っておられます。

「真実の教えに目覚めてくれ」という祈りにも似た心からほとぼり出た叱りであり、たたきであるからこそ、修行者たちはそれに反発することなく、素直に受け入れられたのです。仏の愛、親の愛、無私の愛がなかったらこんな叱り方はできません。

大勢の人のなかで、人を叱るな

私は生来ノロマな人間で（生来という両親の責任のようで申し訳ないことですが）、仕事ならいつでも間に合わないし、人と待ち合わせなら必ずといってよいほど遅刻してしまふのです。

ある時二人の友と待ち合わせをしました。時間どおり来ない私に対し、N尼がS尼に向かって、

「青山さんはいつも待たせるのでね」

と、つぶやくように言ったそうです。

非難するでもなく悪気でもなく、何ということなくつぶやいただけのようですけれど、私を大切に思ってくださいだったS尼は、自分のことのようにつらい思いの中でこの一言を受けとめたのでありましよう。

あとで二人きりになった時、S尼は真剣な顔で私に言いました。

「あなたが少しでも人に悪く言われると、自分が言われるよりつらいのよ。遅れないでちょうだい」

その目には涙があふれておりました。泣きながら叱ってくれる友の前で私は深く頭を垂れながら、「この友のためにも遅れてはいけない」と心に固く誓ったことでした。

あいも変わらずノロマで間に合わない月日を重ねている私ですが、その友の言葉と声を生涯忘れることはありませんでしょう。二人きりになった時、涙を流して叱ってくれた——これこそが良寛さまのいう「客の前にて、人を叱るな」の心だったと思います。

仏教の深層心理学ともいうべき『唯識』のなかに、《叱りとか怒りとかが煩惱であるかそうでないかを見分けるポイントにあるのは、^が我の有無である》という教えがあります。

どれだけ相手が悪いことをしていたとしても、それに対する叱りとか怒りのなかに私心がひそみこんでいる時は、煩惱になっってしまうのです。根底に私心があつての叱りは相手の心に傷をつけこそすれ、素直に非をたださせる方向へは決して向かわないということを私たちは忘れてはいけないと思います。

「私心“や”我“がひそんでいませんか？」

ここ数年、教育の現場から「このごろのお母さんは怒ることはあるけ

れど叱らなくなった」という声をよく聞きます。

怒るという心の状態を分析してみると、たとえ相手に非があろうと自分の思いになわないために腹を立ててしまったのであれば、重心は自分のほうにあります。

叱るといふのは何とか気づいてほしい、よくなつてほしいという愛の思いから出たので重心は相手のほうにあります。その行為の根底に私心があるかないかの違いで、一方は煩惱となり一方は慈悲行となるという『唯識』の教えを教育の現場から流れてきた声と重ね合わせて、思いをあらたにしたことでした。

道元禪師も、

「にくむ心にて、人の非をみるべからず。ほとけに非を制することあれども、にくめとは非ず」

と、おっしゃっております。

叱ることはほめることよりむずかしい。よほどの深い愛がなかったら、叱れるものではありません。

だから叱ってくださいの方があつたら、どんなに感謝してもしきれない思いで、その叱りをいただかねばならないと思い、叱らねばならない側にまわつたら如浄禪師やS尼のように泣いて叱る、そんな叱り方ができる人間になりたいと思うことです。

◆道心・趣味の会◆

短歌

● 炎天下大輪のダリアは萎えつつも
花冠をかたむけて咲く

● 日を恋うる凌霄花の朱の色の
こぼれんばかり空の青に映ゆ

東区 矢野 淑子

俳句

● 子の問いに応えつづけり新樹光

● 若葉より雫のやうな光かな

● こでまりの揺るるは風の遊びかな

● 蝸牛かたつむりとして瞬りたる

廿日市市 伊藤 順二郎

◆行事報告◆(四月～六月)

● 四月二十二日(日)

五月十九日(土)

・檀信徒交流登山(予定)

雨天のため中止となりました。

● 五月五日(土)

・檀信徒交流コンサート&懇親会

桐朋学園大学音楽部ピアノ科四年生、伊藤 優さんのピアノと同大
学ヴァイオリン科四年生佐田大陸
さんのヴァイオリン、クラシック

二重奏に老若百二十人の聴衆を魅
了し、後は和やかなワインパーテ
ーで楽しい一時でした。

● 六月七日(木)～十五日(金)

・パリ禅道尼苑訪問とフランス
世界遺産巡り(二十八名が参加)

パリより南百五十キロ程の町プロ
アの郊外に在る「禅道尼苑」で開
催された、曹洞宗ヨーロッパ布教
四十年記念行事に参加の後、ロワ
ール渓谷の古城巡り、西洋の驚異
とも称される神秘的な修道院「モ
ンサンミッセル」にお参りし、第
二次世界大戦が終局へ向かう序と
なった、ノルマンディー上陸作戦
で知られる地方のオンフルール港
町・パリ近郊の世界遺産・美術館
等を観光しました。



神秘的な修道院「モンサンミッセル」

◆行事案内◆(七月～九月)

● お盆前伽藍掃除

・七月二十九日(日) 午前九時半よ
りお昼まで
お素麺を用意しております。

● 孟蘭盆会法要

・八月六日(日) 午前十時半より
孟蘭盆会施食供養法要・法話
十二時半終了

● お月見コンサート「[sukimi in 寺]

・九月二十九日(土)

フルート＝エリザベト音大教授
大代啓二、ファゴット＝NHK交響
楽団主席奏者 岡崎耕治、ピアノ＝
岡崎悦子のお三方による三重奏。

● 青山俊重老師講演会

・九月三十日(日)

午前の部 午前十時半～十二時
午後の部 午後一時半～三時
(坐禅をされる方は九時より)
参加費 二千元

(午前、午後のみ方は各千円)

昼食代一人 百円

※昼食は持参されても結構です。

※お茶はご用意致します。

※昼食が必要な方はお電話にてお
申込み下さい。

● 大本山永平寺参拝と奥飛騨の旅

・十月十五日(月)～十七日(水)

ご本山永平寺と平湯温泉に宿泊予
定、参加費は参加者三十名として
お一人七万円前後の予定です。

■毎月定例行事

● 上田宗箇流茶道稽古日

毎月一回 第二又は第四金曜日の
予定 午後二時から

※お抹茶と和菓子を気軽に楽しむつ
もりでご参加下さい。

● 御詠歌の会

第二金曜日午前十時より自主練習
第四金曜日午前九時より講師を招
いて練習 昼まで

◎ 茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講
師の都合により変更する場合もあ
ります。初めて参加される方は、
お寺に電話にてご確認ください。

■毎週定例行事

● 暁天坐禅会 月曜日～金曜日
毎朝午前五時十分～五時五十分ま
で

● 水曜坐禅会

午後七時より坐禅・茶話会 終了
八時半

● 婦人坐禅会 毎週金曜日

午後一時より坐禅・茶話会 終了
三時

(第一金曜日のみ坐禅の後、写
経・茶話会)

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣
味の短歌俳句など何でも結構で
す。お寄せ下さい。